

姫路シンポジウム等報告

加藤淳平^{かとうじゅんぺい}

「文語の苑」は、平成二十七年五月十日、「文語の苑」會員にして、平素温かき指導を賜る藤原正彦氏の館長たる姫路文學館の、『文語 この美しい響き』と題したる會の開催に協力す。姫路文學館スタッフの周到なる準備態勢と効率よき運営により、二百人を越ゆる聴衆が、最後まで熱心に参加せり。下記は、その報告なり。

一 まづ「文語の苑」愛甲代表幹事（當時）より挨拶を述べ、「文語の苑」結成の経緯、その目的とせる文語普及の意義を説明しつつ、「文語の苑」と藤原館長の關係に及ぶ。愛甲代表幹事、後日、聴衆の文語への熱意溢るる眼差しを感じたりと語る。

二 次いで加藤（當時「文語の苑」幹事）、「日本の

近代詩と文化傳統」と題し講演す。姫路は、江戸時代の前期、四代將軍家綱の時代に、後に文樂、歌舞伎、舞踊に取上げられ、全國に知られたる、旅宿但馬屋の娘お夏と手代清十郎の驅落ち事件の起りし地なれば、そのお夏清十郎を題材とせる島崎藤村が「こひぐさ」を詠み、その他「文語の苑」刊行の『文語の苑』文語詩集』掲載の戀愛詩を中心に、明治以後の日本の文語詩を紹介す。「文語の苑」は、昨年の活動の重点を文語詩に置きたればなり。

ただ我、不勉強のため、『文語の苑』文語詩集中の詩人、三木露風の姫路近傍の出身なるを知らざれば、わが紹介せる文語詩中に三木露風が文語詩を加へざりしを後悔す。

三 暫時の休憩の後、「文語の響きを歌にのせて」と

題したる演奏會に入る。ソプラノ歌手のエリザベト音楽大學林裕美子教授の歌唱、大阪音樂大學中村展子講師のピアノ伴奏により、廣く知られたる「ローレライ」、「早春賦」、「夏は來ぬ」等より、平素聽くこと尠なき萩原朝太郎が「旅情」等の歌曲に至るまで、文語の歌詞による歌曲を味はふ。

四 最後はシンポジウム「文語の樂しみ方」なり。コーディネーター、藤原姫路文學館長の輕妙なる司會の下、加藤、「文語の苑」關西代表、瀧一郎大阪教育大學教授、中杉隆夫姫路市教育長の順に、それぞれ文語との關はりを述べ、文語を讀む樂しみを語る。

五 この催しの成功を收めたるは、一に懸かりて藤原正彦館長の指導力と絶大なる人氣に因る。されど同時に、姫路のみならず地方に、國語古典及び文語に對する潜在的關心の多く存するを實感せらる。

「文語の苑」として、斯かる潜在的關心を如何にせば顕在化し得るや。それは今後の課題なり。